

「お前の授業は英語じゃあない、社会だ！」

:『英語にとって「評価」とは何か?』第2部“「量」の指導と「量」の評価”より

新見 明 (愛知・豊田)

1. <引用その1>

第1章「量」を話す 1. 五つの宣言・方策

- (1) クラス全員の前で最低6分以上のスピーチをしてもらう。1回のスピーチは何分でもよいし、何回挑戦してもよい。とにかくスピーチの合計が6分を超えることが条件である。できれば10分を目標に頑張ってもらいたい。
- (2) 最低5回の映画・ビデオを見せるので、毎回それについて感想を英語で書き、それをスピーチ原稿とする。たとえその映画・ビデオについてスピーチをする予定がなくても毎回、原稿だけは提出してもらう。(したがって最大出場回数は5回)
- (3) スピーチするときは原稿を棒読みしてはならない。原稿を棒読みしている場合は、その原稿を没収する。また原稿を丸暗記するのではなく、なるべくメモを持参し、それを見ながらスピーチできるようにする。
- (4) スピーチ原稿の英文は単文で書く。接続詞は AND, BUT だけでよい。話題に行き詰まったら「話は変わりますが」(To change the topic)と続けていけばよい。
- (5) 最初の原稿だけは、映画・ビデオの感想ではなく、クラスの皆がお互いを知り合うために自己紹介とし、出席簿の順番に発表してもらう。しかし、映画・ビデオの感想からは全くの自由発表とするので、だれがどんな順番で何回発表するかは、全く本人の自由意志とする。

(pp.101-102)

2. 引用した理由

引用が長くなりましたが、抜粋するだけではどうもうまく伝わらないと感じて「五つの宣言・方策」を全部引用しました。この引用部分もそうですが、第2部“「量」の指導と「量」の評価”には貴重な実践がたくさん詰まっています。私の大学での授業は(2)番の「最低5回の映画・ビデオ」の部分だけに感心して実践しているようなものです。私の授業には英語の力をつける方策がないのです。つまり「お前の授業は英語ではない、社会だ！」と寺島先生からひどく叱られた言葉が当てはまるのです。

ここでは(2)番だけでなく(1)番から(5)番まで英語のスピーチの力をどのように付けていったらいいかが書かれています。それも15コマ全体にわたって展開されています。しかし私は、このスピーチ実践を中学校の授業でつまみ食いしたことがあるだけです。自己紹介の英作文かなにかだったでしょう。全員、書いた英文を教壇のところで発表するのですが、それを私がストップウォッチではかって、どれだけ言えたかを点数化するだけでした。たった1回です。これだけではスピーチとはどんなものか垣間見るだけで、話す力はずきません。寺島実践は5回書いて、最大5回発表するのです。そのなかでスピーチの力が付いてくるのでしょうか。

(3)の「原稿を棒読みしてはならない」は、実践したことがありません。私の中学生はみな英文を読んでいただけです。これを「暗記して発表しなさい」というのではとても大変な課題になってしまいます。暗記するのだったら短い英文にしておいた方が無難だ、となってしまう。それを防ぐ方策として、この章の後半に書かれていますが、英文の相互添削があります。互いに英文を読んで添削することによって、自分の英文も見直すこと

が出来ます。そして「メモを持参し、それを見ながら」スピーチをするのは、メモをつくる段階で自分の発表を要約し、丸暗記しなくてもいいようにされています。そしてメモだけで発表するためにはできるだけ自分の知っている語句や文型で英文をつくるという、よい副産物もあります。辞書で引いた難しい単語ばかりを使っているのは、原稿を見ないで発表することは出来ないからです。このように丸暗記しないでスピーチができるような工夫がされています。

しかも(5)番では「自己紹介」という仲間作りも取り入れられています。教室に集まった学生でもお互いにどこの出身か、今何に興味を持っているか知らないことが多いものです。それが同じ地域の出身であったら、同じ興味をもっているものがいればスピーチを聴くときに、興味が倍加します。またこれがスピーチの初歩として役割も果たしています。

ところが(2)番の「最低5回の映画・ビデオ」があるからこそ、この授業が英語のみでなく人間・社会にたいするものの見方を深めてくれるものとなっているのです。ここでは「当年が、“国際先住民年”であったこともあって、映画・ビデオの統一テーマを“民族問題”に据えたのである」(p.103)と書かれています。その映画・ビデオではアメリカ先住民やアイヌの人たち、イラン・カラブテ（これは私もよく知りません）を扱い、学生達は韓国・朝鮮人の強制連行や長良川河口堰の問題と関連させて「民族問題」を考えています。英語を書くこと・話すことの勉強が、単に技術の勉強に陥ることなく、感動や思考を深める学びになっていることが(2)番の大きな力です。

しかし私は、『英語にとって「文法」とは何か?』のなかの次の言葉が頭から離れません。

それにつけても、高校あるいは中学校においてすら、これを教材にさまざまな実践が生まれ、しかも実践記録を読むと、生徒が非常によく中身がわかったとか感動したとか書かれている。一体彼らにどの程度キング牧師の英文がわかったのか。教師にすらよく読めない・和訳しにくい文章を彼らはどのようにして読んだのだろうか。あるいは教師はどのようにしてそのような複雑な文章を読む力を彼らに与えたのであろうか。あるいは教師はどのようにしてそのような複雑な文章を読む力を彼らに与えたのであろうか。それが私の第1の疑問だった。

想像するに、ひょっとして彼らは主に教師の語り口、資料や和訳等によって感動しているのであって、英語そのものがよくわかり、その中で感動しているのではないのではないか。これが私たちの研究会で出された第2の疑問であった。

ところがそれに引きかえ、全く逆のスタイルの授業もある。つまり英文の内容よりも、英文の構造分析に主眼をおくというやり方である。その英語の授業のねらいは、英語の授業を通じて論理的能力を鍛える、論理的にものを考える力を育てるということであるらしい。山下(1981)がその典型であろう。しかし、果たしてそれだけでよいのだろうか。

外国語をきちんと学ぶことは、論理的能力を鍛えることになるし、またある意味ではそれ抜きには外国語学習は存在し得ないと私は思っている。しかしたとえ、その英文の構造分析をめぐって、生徒たちがどれだけ生き生きと論争していようと、それは、ある意味では、感動教材の「日本語による説明」によって生徒がいきいきとしているのと同質ではないか。つまりどちらにしてもなにか欠けているものがあるように思えてならない。

要するに欠かしてならないのは「英語そのものの能力」をどうやってつけるかということだ。そのためには、英語そのものにたくさんふれること、しかも

どういう形で触れるのかが大切になってくる。後者の場合は1時間の授業で英語に触れるのはたった one sentence かも知れないのだ。果たしてそういう中で英語の力そのものはつくのだろうか。その点に関しては、感動用材の場合も事情は同じで、生徒がほんとうに英語そのものと面と向かい合っているのかはきわめて怪しい。先にも述べたように、生徒が感動しているのは、教師の日本語による語り口、豊富に配られる日本語の資料によってではないかと思われる節がある。(P.53)

長い引用になりましたが、私の実践は、上記の引用では「主に教師の語り口、資料や和訳等によって」指導しているだけであって、「英語そのものを通じて“わかる”喜びが必要」がある、にはなっていないということです。

<引用その2>

第4章「量」を聴く

- (1) 演説「I HAVE A DREAM」を約50段落に分ける。学生には「合わせ読み」の要領を説明し、最初の段落からスタートして間違えずに到達したところまでを当面の点数とする。
- (2) このテストは何回挑戦してもよい。次回挑戦する時は失敗した段落から出発し、次に間違えたところまでを次回の点数とする。こうして期限内の最終到達点が「合わせ読み」の点数となる。
- (3) テストは教師の指名順ではなく学生の立候補順とする。学生は自宅で練習してきたテープを持参し、自分のテストを受ける段落からすぐスタートできるよう、あらかじめ頭出しをしておく。(p.111)

<引用理由2>

この第2部“「量」の指導と「量」の評価”には“「量」を読む”ばかりでなく、“「量」を書く”、“「量」を話す”、“「量」を聴く”まで様々な実践が紹介されています。いかに私がこれらの実践をしてこなかったか、また理解していなかったことを思い知らされます。ですから上記の引用も“「量」を聴く”の寺島実践がどのように行われたかを読み直し、自分の実践を再検討する意味で取り上げました。

上記の寺島実践は「合わせ読み」の骨格が書かれていて、だれもがやってみたくなる実践です。1回限りのテストではなく、間違えたところから再挑戦できるテストは自分が努力さえすればいい点がとれると思わせる実践です。そして「上手い・下手」の「質」を評価するのでなく、どれだけ努力したかという「量」を評価している点で学生のやる気を引き出し、しかもテストで力をつけていく実践だと思えます。

私は大学で演説ではない教材を扱う場合は、「合わせよみ」もしくは「一人でリズムよみ」をシラバスの最後にいれます。ところがほとんど「一人でリズムよみ」ばかりで、「合わせ読み」に挑戦する学生はいませんでした。だから「合わせ読み」の実践はやったことがないといえます。今だったらテープを持参させる必要はなく、CDのタイマーを記録しておけばどこまで学生が進んだかわかる、と準備しておいたのに実施できませんでした。

私は授業の最初に「リズムよみ」をグループでして、そのあと英文に「記号をつけ」ながら「立ち止まり訳」をする授業をしています。そしてグループでの「リズムよみ」が全文終わった段階で「通し読み」に移ります。そして最後に「合わせよみ」もしくは「一人でリズムよみ」をします。しかし、残された2・3時間では「一人でリズムよみ」は1ページか2ページ進むだけです。全体の英文が10ページほどある英文ですから、まったく不十分な実践です。学生の読みが上達したという手応えもありません。学生は難しい語句

をかたかなを頼りに四苦八苦して読んでいます。

ここからは<疑問点>にもなります。10ページほどの英文を「立ち止まり訳」をしながら、「リズムよみ」「通しよみ」「合わせよみ or 一人でリズムよみ」をするのは時間的に無理があるのではないだろうか。

寺島先生が以前マイケル・ムーアの「Sicko 演説」の授業を岐阜大でされたときは、和訳はたぶん宿題になっていたと記憶しています。ですから15コマの授業のなかで「音声理論」→「リズムよみ」→「通しよみ」→「表現よみ」をやれたのだと思います。また寺島先生から「Dictator」や「I Have a Dream」は前期・後期にわたって1年間でする必要がある、と指導を受けたことがあります。つまり「音声」の授業と「読み」の授業を分けて1年通したシラバスをつくる必要があるということです。宿題として訳がやってこれれば半期で音声の授業ができるということではないでしょうか。

私の実践が「立ち止まり訳」も「音声」もどちらもやろうとしているから、どうしても十分な成果がでないのではないのか。この点をもう一度検討し直して、シラバスをつくってみたいと思います。

ここまで書いてきて、この課題3の締め切りが17日に延期になったので、もう一言つけ加えます。次年度4月からの教材を作っていて、はじめブログ「百々峰」に載っていたRTの「Yasukuni Shrine Visit」を教材化しました。日本の戦争時の歴史を考える上でとてもいい文章だと思ったからです。Democracy Nowのようにインタビューでなく、書き言葉なので、美紀子先生が前回の集まりで紹介されたように、「小見出しづくり」や「構造よみ」ができるのではないかと思ったからです。しかし、一方でいま政治的論争の中心になっている教材を扱うことは、危惧される面があって心配していました。

そこで「音声」を中心に扱うのだったら、マイケル・ムーアの"America Is Not Broke." 演説ならどうだろうかと、「リズム読みプリント」と「記号づけ・番号づけプリント」（前半は記号が付けて、後半は自分で記号をつけながら訳す）をつくりました。そこで、山田先生や美紀子先生に打ち合わせのため連絡をしたところ、山田先生から、自分が実践された"America Is Not Broke."のプリントを早速送っていただきました。ところがそのプリントを見て驚いたことに、前回の集まりで美紀子先生から紹介された"How Austerity Kills"のプリントと同じ作りになっているではありませんか。つまり、英文の上にリズム記号、英文の下にカタカナでなく、立ち止まり訳が書かれています。つまり、このプリントのねらいは、「記号をつけながら読む」ではなく、「音声」を中心に授業を行うために作られたのではないかと理解しました。はたしてそういう解釈でいいのか、今後も検討をしていきたいと思っています。